

第69回国立民族学博物館運営会議議事要旨

日時 令和5年11月8日(水) 15:00～18:08

場所 国立民族学博物館第1会議室

出席者

(館外) 岡田、窪田、高倉、富沢、中谷、水沢の各委員

(館内) 飯田、宇田川、韓、岸上、園田、日高、福岡、南の各委員

(陪席) 吉田館長、猿渡管理部長、一鷗総務課長、小野研究協力課長、
馬場財務課長、前原企画課長、北條情報課長

(事務局) 河野総務企画係長、岩橋総務企画係員

議事に先立ち、岸上議長から、本会議は国立民族学博物館運営会議規則第5条第1項及び第3項による成立要件を満たしている旨の説明があり、総務課長から、配付資料の確認があった。

議 事

1. 会議の運営について

(1) 館長挨拶

吉田館長から、第69回国立民族学博物館運営会議(令和5年度第2回)開催にあたり、挨拶があった。

(2) 前回議事要旨(案)の確認について

岸上議長から、資料1に基づき、第68回国立民族学博物館運営会議(令和5年7月6日開催)の議事要旨(案)の確認が行われ、原案どおり承認された。

2. 協議事項

(1) 教員人事について

岸上議長から、資料2に基づき、人事委員会から提案のあった4件の人事案件(助教の採用3件、テニユア付与1件)について審議願いたい旨の説明があった。続いて、選考委員会の各主査から選考過程等について説明があり、審議、投票の結果、全件承認された。

なお、日高委員から、テニユア付与の通知手順を確認したい旨発言があった。「人間文化研究機構テニユアトラック制に関する規程」の改正が予定されているので、申請者へ通知文が交付されるには、従前に比較して時間を要することを確認した。また、テニユア付与と同時に准教授として採用をする件について、「国立民族学博物館研究教育職員のテニユア付与実施要項」にその旨の記載が必要との意見があり、人事委員会で検討することとなった。

(2) 「国立民族学博物館長候補者の選考に関する申合せ」及び「国立民族学博物館長候補者の選考に関する申合せの取扱い」の一部改正について

岸上議長から、資料3に基づき、館長候補者選考検討委員会から提案のあった「国立民族学博物館長候補者の選考に関する申合せ」及び「国立民族学博物館長候補者の選考に関する申合せの取扱い」の一部改正について説明があり、審議の結果、原案どおり承認された。

(3) 「館長に求められる人材像」について

岸上議長から、資料4に基づき、「館長に求められる人材像」について説明があり、審議の結果、館外委員から寄せられた意見を基に再考し、次回、再度審議することとなった。

3. 報告事項

(1) 人事委員会について

岸上議長から、資料5に基づき、令和5年9月4日にメール開催及び9月29日に開催された人事委員会について、報告があった。

(2) 共同利用委員会について

宇田川委員から、資料6に基づき、令和5年7月31日、9月26日にメール開催及び9月8日に開催された共同利用委員会について、報告があった。

(3) 研究倫理委員会について

飯田委員から、資料7に基づき、令和5年7月7日にウェブ開催された研究倫理委員会について、報告があった。

(4) 館長候補者選考検討委員会について

岸上議長から、資料8に基づき、令和5年10月13日にウェブ開催された館長候補者選考検討委員会について、報告があった。

(5) 共同研究代表者の特別客員教員の受入れについて

岸上議長から、資料9に基づき、人事委員会から提案のあった共同研究代表者の特別客員教員2名の受入れについて、報告があった。

(6) 国立民族学博物館の動きについて

1) 国立民族学博物館の最近の動きについて

各委員等から、資料10から15に基づき、以下の報告があった。

- ・園田委員から、入館者数等について
- ・岸上議長から、本館の活動について
- ・吉田館長から、受賞について
- ・宇田川委員から、学术交流協定の締結について
- ・南委員から、総研大について
- ・財務課長から、令和6年度概算要求について

2) 国立民族学博物館をとりまく動きについて

吉田館長から、資料16に基づき、次の事項について報告があった。

- ・創設50周年記念事業について
- ・厨子甕、骨壺の返還を求める要請について
- ・令和5年人事院勧告に伴う給与改定について
- ・日本学術振興会「研究環境向上のための若手研究者雇用支援事業」への申請について
- ・土地借料について

4. その他

館外委員から寄せられた主な意見は次のとおりであった。

- ・創設50周年を迎えて、改めて、民博の50年は何だったのかを振り返り、どのように未来に繋げていくのか、メッセージを出していただきたい。

- (「厨子甕、骨壺の返還を求める要請について」の報告を受けて) イギリスへ渡航したが、ものすごく大きく変わってきている。返還・和解・謝罪・ディコロナイゼーション、その流れは戻らないと思う。海外に身を置いてみると、日本はいかにずれているのか感じる事となった。日本社会全体の意識として、こうしたことはまったく共有されていない。厨子甕返還要請の対応も、これだけでいいのか。対話を求められ、こちらの労力を要しなければならない状況になっていくのではないかと感じた。
- 3件の採用人事が承認され、偶然にも北海道、あるいは沖縄をベースとされている方で、先住民の研究にも従事されていて、これも一つの潮目なのかなと思った。オランダへ渡航したが、国外の博物館・美術館の方向転換が目覚ましいとひしひしと感じた。日本と違い、国自体が転換しているところだが、展示を通じて何をメッセージとして伝えるかということに、非常に明確な姿勢を示していると感じた。日本ではなかなか難しいが、新しいタイプの助教も加わることから、次の展開へ向かっていけるのではないかと感じた。